
死神のカード

蓋島尻歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神のカード

【Nコード】

N6701L

【作者名】

蓋島尻歩

【あらすじ】

赤いカードは復活。俺は、赤いカードを燃やし一度いざなった二人の女を引き戻そうとするが、それは新たな暗黒の世界のはじまりでだった……。

テーブルの上には、木肌に迷路地図のような複雑な文様を施した箱がある。

その脇には、くすんだ赤と灰色のまだら模様のカード、そして、大きく歪な “ さやえんどう ” のような特製の筆記具。

俺は特製の筆記具を手に取り、カードに『ヤエガキエリ』という文字と八桁の数字を書き入れると、ビンテージ物のジッポーで火をつけた。

カードはぼつと炎を発し、一瞬のうちに消失した。跡には、燃えカス一片残っていない。

「ふう」

一息つくくと、俺は特製の筆記具を箱の引き出しに戻した。

グスタフの、ジョーカーのような晒い顔が目には浮かぶ。

奴に毛嫌いされている俺だ。

そのうち奴に始末されるかも知れないが、今までと同じように好きにやるだけだ。

俺は黒い革のコートを羽織り、部屋を後にした。

真夜中の帳は、物悲しく切ない。十一月中旬とは思えない肌寒さが、それに拍車を掛ける。

白い吐息の向こうは、新宿。

眠ることのない街の喧騒を余所に、静寂がこの辺り一帯を包み込み、神の世界のような静謐な空間を作り出している。

こんな静謐な空間に住まう、余りにも場違いな自分。

いや、人間の世界では、悪魔のような独裁者でも神聖な墓地に葬られるという。

満更、場違いではないかも知れない

そんなことを心の何処かで思いながら、俺は重い足取りでアジトに向かった。

そこは、グリフィン。

グリフィンは、歌舞伎町の裏通りにある、カウンターテーブルだけの小さな飲み屋。

俺以外、薄暗いオレンジ色の照明を灯した陰気なこの店に、足を向ける者はいない。

「相変わらず、几帳面ね」

俺が分厚い木製の扉を開け顔を見せると、ミュキは言う。時代物の柱時計が、丁度午前一時のベルを鳴らしたのである。

直後、扉がバタンと閉まり、扉の上端にぶら下がった大振りのカウベルがコロンと鳴った。

俺は目の前のスツールに腰掛ける。

「終わったの？」

と言いながら、ミュキはグラスにミルクを注ぐ。俺は頷きながら、タバコに火をつけた。

続けてミュキは、

「無理しないで」と言った。

別に、俺は無理しちやいない。俺は俺で、一人ひとりの人間の生き様を見て誘っている。

だから、俺はいつも、

「心配しなくていい」と言う。

俺はタバコの煙を思い切り吸い込み、吐き出した。

「このまま、グスタフが黙って見ているとは思えないわ。そのうちひどい目に遭わされるかも知れない」と、ミュキが心配げに言う。

「ふんっ、魔王のただの使い走りに、何が出来る」

俺は吐き捨てるように言い、ミルクを口に含んだ。

グスタフは、死神の監視人。奴は、毎月一二日に、死神の“言い訳”を聞きに此処に現れる。

死神の進退は、グスタフから報告を受けた魔王が決めていたが、グスタフが監視人となってからというもの、魔王は奴の進言を鵜呑みにするだけだった。

グスタフの機嫌を損ねることは、死を意味したのである。事実、グスタフの報告の後は、必ず、一人また一人と死神が煙のように姿を消していた。

だからといって、俺は奴に媚び諂うことはしない。

「そうね、あいつはただの口の減らない告げ口屋。でも、あまり甘く見ない方がいいわ。あいつの一言で、あなたも消えるかも知れない」

ミユキが不安げに言った。

「そうかもな。だが、そう簡単には消されないぜ」

俺は、そう強がって見せた。

“ドン、ドン”。久しぶりにミユキと会ったというのに、あの忌々しい”銅鑼”の音。

グスタフの奴、待ちかねて業を煮やしているのだ。

「さつきから、お待ちかねよ。今日は、随分おかんむりみたいだわ」

ミユキはそう言って、上目遣いに顎をしゃくり上げる仕草を見せた。

「ちっ、騒々しい奴だぜ」

俺は不機嫌に言う、重い腰を上げた。

「気をつけて」

と、ミユキが囁くように言う。

カウンターボード裏の梯子のような急階段を上がっていくと、そこは一点の光もない漆黒の闇の空間である。

空間がどこまで広がっているのか、今でも皆目見当がつかない。ただ、一階に通じる穴から差し込む薄暗い光が、空間の闇の存在を示しているだけだ。

俺は闇を散らしながら、慣れた足取りで暗闇の中に入っていく。しばらく進み、俺はその場で腰を落とした。腰を落とせば、なぜか其処には椅子がある。

「待つとつたぞ」

正面から聞こえるグスタフの声。この声を聞くと虫唾が走る。

ビブラートのかかった薄気味悪く、男女の別も年齢もわからない声。

それに、妙な言い回しとイントネーション。

俺は、奴の正体を知らない。奴とあいまみえるのは、いつもこの霧のかかった真つ暗闇の中だからだ。

「何も言うことはないぜ」

俺は、ぶっきらぼうに言った。

「くくく……」

いつもながら、グスタフの胸くそ悪い晒い声。同時に、空気の波が俺の頬を撫でる。近くで、息をふーっと吹き付けられたような感覚。「相変わらず礼儀を知らぬな、お前は」

「それは、お互い様だろ。早く用件を言うんだな。こう見えても、俺は忙しいんだ」

俺は喧嘩腰に言い、正面を睨み付ける。

「まっ、いいだろう。早速、本題に入るとしよう」

グスタフの声は冷静を装っているが、腹の中は煮えくり返っているに違いない。

「お前、また人間を助けたな」

グスタフは言った。

「助けただと？ 言いがかりは止せ。誘いの日を変えたただけだ。掟は守っているぜ」

いつものパターンだ。グスタフは、どうでもいい事に因縁をつける。俺は、当然、グスタフの言いがかりを非難し、自分の正当性を主張する。

だが、グスタフにとって、それはいちやもんを付ける格好の契機に過ぎなかった。こっちが何を言ったところで、グスタフの都合の良い結論に落ち着くのだ。

グスタフは、掟は破られるものと思っている。それどころか、自分が掟だと思ってやがる。ましてや、魔王という後ろ盾があれば、怖いもの知らずというわけだ。

「掟を守れば、良いというものじゃない」

案の定、グスタフ流の詭弁を吐いた。今度は、獰猛な獣を想わせる

不気味な唸り声が響く。

恐らく、グスタフの傍らに魔獣が控えているのだろう。その獣が放たれれば、俺などひとまりもないに違いない。

「お前は、余りにも多くの人間の死期に手を加え過ぎた。近頃、そういうお前に異を唱える者が多くいてな。このままでは、示しがつかんのだ」

一瞬、真空の中に居るような静寂が際だった。

俺の耳は、厄介な耳鳴りのようにツーンとしている。

人間の死期に手を加えているのは、俺だけじゃない。そもそも、死期の延伸は死神に与えられた絶対的裁量。しかも、この世界のために、良かれと思いやっている。

たとえ、魔王にも、とやかく言われる筋合いはない。

だが、死神を生かすも殺すも魔王の裁量。結局、魔王の機嫌を損ねる者は始末される宿命にある。

「そうか、そういうことか……分かったぜ、好きにするがいいさ」
俺はそう言って、表情なく晒った。

人間の死期は、生まれ出でた時から決められている。

死神は、それぞれの人間の死期を関知し死後の世界に誘う。そうして俺は、五百年以上に亘り、何千という人間を死後の世界に誘ってきた。

時に、死神は人間の死期を延伸することがあった。

現世への極度の未練は、その人間を極端に生に執着させ、死して悪霊となり現世に災いをなす。

それは、魔界と人間界の均衡の維持に悪影響を及ぼす事象だった。

死神は、人間の魂を見極め平成をはかるために死期を延伸し、魔界と人間界の均衡を維持しようと努めてきたのだが……。

それも、ただの時間稼ぎに過ぎなかった。魔界が人間の生死を掌り支配し始めてから、魔界と人間界の均衡は崩れゆく運命にあったのである。

この世界で、永遠に存在しうる物はない。しかし、一方の存在なくしてもう一方は存在しえず、しかも、そのことが滅亡のメルクマールになるうとは、なんという皮肉であるうか。

均衡の崩れは結界の歪みから始まり、やがて侵食へと進んでいく。

結界の侵食が起き始めたのは、二千五百年前。

侵食は、長い年月を掛けて、氷塊が少しずつ少しずつ融けていくように進み、ある段階に達すると突然進行を停止する。だが、侵食が収束したのではない。次の段階である亀裂が始まる前兆なのである。亀裂は大樹に張る枝のように拡がりながら、結界深くにクレバス状に入り込んでいく。やがて、結界が持ち堪える限界を迎えた時、一気に、雪崩のように崩れ去る。

結界が崩壊すると、魔界と人間界は融合し、あらたな地獄の世界へと引き込まれていくのだった。

そこは、灼熱の地表と燎原の焰に覆われた想像を絶する無間の地獄の世界。限らない時間をかけ、焰は皮膚を血肉を焼き溶かし、最も邪悪な本性が地を空を腐った血肉で染めていく。永遠に続く苦痛、永遠に続く死の苦しみ。

魔王が、結界の崩壊を恐れたのも無理はない。

折りしも、グスタフは、結界の崩壊の原因が死神が人間の死期に手を加えることにあると魔王に注進した。

それを鵜呑みにした魔王は、なんと愚かな統治者だろうか。魔界と人間界のバランスを維持する、重要な役割を果たしてき死神の排除をグスタフに命じるなど。

魔王からお墨付きをもらったグスタフは、定例の ” 報告会 ”

の度に根も葉もない事をでっち上げては、死神を一人また一人と葬っていったのである。

「で、この俺をどうするつもりだ」

俺は、消されることを覚悟していた。消される前に一矢報いるつもりでいたが、グスタフは思いもよらないことを言う。

「魔王のお気に入りのお前をどうこうするなど、わしにはとても……くつくく……」

グスタフの陰湿な晒い声が、暗闇に響く。

「そうさなあ、お前が助けたあの二人の女を、誘ってもらおうか」

「なに、あの二人を、誘えだど？」

一度死期を延伸した者を誘うことは、極刑に値する掟破りだということは、貴様が一番分かっているはずだ。始末するなら、この俺を始末しろ。さもないと、地獄の底で魔物の餌になるだろうぜ、俺たち二人ともな」

俺は挑発したが、自分が掟と誤っている奴に聴く耳はない。

「いやいや、お前には、これから魔王の役に立ってもらわなければならんからな。それに、私が言うのもなんだが、今誘えばあの者どもも、少しは救われるのではないかな？」

と、グスタフは思わせぶりに言い、

「それから、掟破りのことだが、この火急の折、掟に背くことも仕方あるまい。魔王からも、お許しをいただいておるしな」

と続けた。

掟は魔王が決めたわけじゃない。掟は、魔界が形成される以前から、結界芯に刻まれていたのだ。

火急の折などと、結界が崩壊する原因を作った張本人の一人がよく言えたものだ。

すると

何処からともなく、ミシ、ミシという不気味な音が聞こえてくる。

いよいよ、亀裂が始まったのである。

亀裂が始まれば、長くとも数十年で結界は崩壊するだろう。

「しかし、おかしいものだ。結界が崩壊することを知っている者は、魔王と私と……そして、お前。

崩壊を必死に食い止めようとしている私に比べ、お前は何もしようとしていない。私を知る以前から結界の崩壊を知っていたはずのお前が、何故、食い止めようとしていないのだ」

と、グスタフは亀裂の音を気にもせず神妙な口調で言う。

確かに俺は、以前から結界が崩壊することを知っていた。結界の崩壊を、止められないことも。

誰から教えられたわけじゃない。暗黙の知でもあるかのように、すでに知っていたのである。

「ふん、偉そうな事を。貴様らは、俺たち死神を犠牲にすれば、結界の崩壊を止められると思っているようだが、それは、とんだ見当違いだぜ」

「何、だと」

グスタフが言うのと、例の唸り声とともにあの空気の波がスーツと俺の頬を掠める。

だが、俺は怯まずに言う。

「いいか、結界の崩壊は誰も止められやしない。俺たちが人間の生死を掌り支配し、魔界と人間界の均衡を崩したのが原因だ。むしろ、自業自得というものだぜ」

流星の俺も身構えたが、それから、奴は予想に反した反応を示したのである。

「くくく……、結界の崩壊の原因が、人間の生死を掌り支配してきた我々にあるだと？ たわけた事を」

と言って、グスタフは俺の挑発を一笑に付し気配を消した。無音の静寂が、闇を包む。

グスタフは、時折、訳もなく気配を消すことがあった。その度に俺は、狼狽えるグスタフを想像したものだ。今度ばかりは様子が違う。

俺は妙な心許無さを覚えながら、グスタフの気配を探った。しばらくすると、グスタフの息遣いが聞こえ、

「ううう……」

それが、呻き声へと変わる。

「お前の話は、実に面白かったぞ」

「な、なにっ！」

俺は、奴のあまりにも頓狂な言い草に面食らった。さらに、奴はとんでもないことを言いやる。

「それに……実に、もつともらしい。」

だが、言っておくぞ。たとえ結界が崩壊したとて、どうという事はない。すべては魔王のご意思のままだ。人間の死期も、そしてお前たち死神の行く末もな」

「ちっ！ 何てえことだ」

グスタフの奴、何も分かつちやいない。こいつは、本当に大馬鹿野郎だ。

「呆れたもんだぜ。ここまでくると、哀れに思えるぜ」

と俺が言ったところで、奴はせせら笑うだけだ。

「何とでも言うがいい。」

良いか、あの二人の女を七日以内に誘うのだ。もし従わなければ、彼奴等を、お前の目の前で八つ裂きにしてとっておきの地獄に送り込んでやろうよ」

と、グスタフは俺を脅しつけ、最後に悦に浸るような含み笑いを聞かせると、気配を消した。

奴は、この俺を散々おちよくった拳句、逃げるように魔界に戻りやがった。

「くそっ……この、外道めが」

俺は、拳を握りしめていた。

空間は、ただの俗世界の暗闇に戻っていた。

怒り冷めやらぬ俺。しばらくの間、このまま暗闇の中でじっとしている以外にない。

どのくらい時間が経過したかは分からない。俺はゆっくりと立ち上り、一階に通じる穴から店へと降りた。いつものスツールに坐ると、ミユキがグラスにミルクを注ぐ。

「どうしたの、今にも人を殺しそうなくらい怖い顔してるわ」

ミユキは俺の顔を見るなり言った。ミユキは利口な女だ、事態の深刻さを察したに違いない。

結界が崩壊すると、魔界と人間界が融合し地獄に呑み込まれてしまうことも、そして、その原因が、魔界が人間の生死を掌り支配してきたことにあることも、俺はミュキに話した。

ミュキは表情を暗くしたが、運命を受け入れようとしていた。

「いいわ、どうせ一度は失くした命だし」

と、ミュキは言う。

ついでに、大愚人のグスタフのことを聞かせてやった。

「なんて愚かなの。自分たちの所為でこの世が終わるというのに、分らないなんて。でも、案外、そういう人はしぶとく生き残るかもね」

ミュキは、この世で最後のパフォーマンスのように笑ったが、それは哀しい笑いであった。

「その空間に呑み込まれると、どうなるの」

突然、ミュキは真顔で訊く。

「どうなるかは分からない。ただ、俺たちが、俺たち自身でなくなることは間違いない」

俺がそう言つと、ミュキは少し俯き加減になり訊き返す。

「そう……あと、残された時間はどのくらい？」

俺は、長くても数十年と答えた。

「これから生まれてくる人は可哀相ね。人生を楽しむ時間が、あまりないわ」

ミュキはしみじみと言った。

同感だった。無理やり人生の幕を閉じられることほど、人間を不幸ならしめることはない。

残酷な最後が、多くの人間に現世への未練を残させる。その魂は、永遠に安らぐことはない。

俺は、悪霊で埋め尽くされる地獄の世界を想った。

暗澹とした絶望的な行く末が、俺の目の前に突きつけられたような気がした。

魔界と人間界の融合は単なる序章に過ぎず、融合の行く末に、想像

を絶する恐ろしい世界が待ち受けているのではないか。

俺は、底知れない不安に襲われた。

「もう、誰にも止められないのね」

ミユキは静かに言った。俺はただ黙って頷くしかなかった。

この時ほど、自分を無力で不甲斐無く思ったことはない。俺が人間なら、自殺するところだろう。だが俺は死神、自分で手を下すことは出来ない。

自分を始末する唯一の方法は、人間を誘うのを止めることだった。誘うことを止めれば、不死の力を失い、人間と同じように死出の旅に出ることができる。

だが、死神の死出の旅路の果ては地獄。

融合によってあらたな地獄に堕ちて行くに違いない。どっちにしても、死神の俺に相応しい末路じゃないか。

最後に、ミユキとエリを誘って仕事を収める。グスタフから与えられた猶予は七日。

すぐにでもミユキに伝えなければならなかったが、俺はなかなか決心を付けられない。

このまま俺が苦悩する風を装っていれば、ミユキが勘づいてくれるかも知れないと、卑怯なことも考えていた。

ミユキは、自分で水割りを作って一口一口飲っている。その姿は、憂いに満ちた女神のようだった。

時折、俺を見つめる目は、俺の心の中全てを見通しているかのようにも思える。

それでも、俺が勇気を奮い立たせて口を開こうとすると、ミユキは言った。

「いいのよ。いつ逝っても」

俺は言葉を失った。俺は、やはり心の中をすっかり見透かされていたのだ。

「もうじき、この世界は終わるといっし……」

ミユキは、俺が望む答えを言ってくれている。

「そんな恐ろしい地獄になんて、行きたくもないし……だから連れて行って、私とエリを」

ミユキは、俺とグスタフのやり取りに聞き耳を立てていたのだ。そんなことをする女じゃないんだが、いつもと違う尋常でない様子が気になったのだろう。それを聞いて、自らの振り方を決めたのだ。

ミユキは、ちょうど十五年前の二十歳の時、五十年死期を延伸した。ミユキより十歳年下の妹のエリは、つい今しがた、死期を五十年延伸したばかりだったというのに。

グスタフも言ったが、今死後の世界へ誘えば、少なくとも恐ろしい地獄の世界には引き込まれずに済む。物事は考えようだ。

これで少しは気が楽に、ミユキとエリを誘うことができる。

その四日後、俺はミユキとエリを誘った。

ところが……。

俺は、自分を納得させてミユキとエリを誘ったものの、妙な後味の悪さがあつた。

その後味の悪さの原因が分かったのは、ミユキとエリを誘った翌日のことだった。

もう五百年以上年前、俺がまだ見習いだったころ、ベルタという教育係に言われたことを思い出したのである。

それは、死神三訓のひとつ、“一度死期を延伸した人間を決して誘わず”だった。

俺が理由を聞くと、ベルタは、

「何も好きこのんで、地獄に堕ちる者はおるまい」

そう言ったのである。

「まさか……」

俺は、ハンマーで、頭を思い切り殴られたような衝撃を受けた。

死神のみならず、一度死期を延伸され再び死後の世界に誘われた人間は、終局、地獄へと堕ちていく運命だった。それに、結界の崩壊と融合によって、あらたな地獄に引き込まれようとしている時であ

る。この先、二人にどれほど恐ろしい運命が待ち受けているか想像も付かなかった。

迂闊だった。愚かだった。俺は、何の罪もない二人を、あらたな地獄に引き込む道程をつけてしまったのだ。

「俺は、なんという、馬鹿なことを……」

俺としたことが、どんなに後悔したところで後悔しきれない。俺は柄にもなく震え、全身の血が引いていく感じがしたのだった。

それだけじゃない。死神が堕ち行く先も地獄。

地獄に堕ちた死神は楔を受け悪霊に変化、地獄の番人として、堕ちた人間の魂を永遠に苦しめ苛めることになる。

それにしてもグスタフの奴、ミュキとエリに恐ろしい運命が待ち受けていることを知っていながら、俺を誑かし二人を誘わせたのだ。身体を生きながら切り刻んで地獄の篝火で焼き、醜悪な魔獣に喰らわせても飽きたらない野郎だ。

「この借りは、地獄で、必ず……」

俺は恨みが骨髓まで沁みていくかたわらで、二人の何も思い残すことのないような、穏やかな死に顔を思い出していた。

ミュキの優しい笑顔が忘れられない。エリの疑うことを知らない笑顔が、目に焼きついている。

「くそ……」

このまま、ミュキとエリを地獄に堕とすわけにいかない。

必死に善後策を考えている時だった。俺は、ふと、

「戻せるかも、知れない……」 そう思い、それが確信になっていく。

もともと、カードは四枚あった。黒と黄色と、くすんだ赤と灰色のまだら、そして赤。

それぞれのカードには意味があり、黒は寿命、黄色は早逝、まだらは延命、そして赤は復活、である。

それぞれのカードの意味は、ベルタから教えられたが、ただ……、「赤のカードは、決して使ってはならない」

ベルタはそう言った。ベルタはその理由は言わず、俺も敢えて聞くとはしなかった。

復活は、死後の世界に誘う死神にとって忌むべき業行、そんなことは死神なら百も承知していたからだ。

じゃ、なぜ、赤のカードはあるのか……理由はどうあれ、今は赤のカードが無性に欲しい。

俺は急いでマンションに戻り、自分の箱を取り出した。

箱を目の前にし、”赤のカードを出せ”、いつものように念じてみたが、何の反応もない。

やはり、死神が扱えるカードじゃないのか……。

もしや……、

俺は、誘われるようにグリフィンに向かった。

トカゲの頭のような形をした鍵を鍵穴に差し込み店に入り、カウンターの裏に回る。

カウンターの高さから天井まである格子状の棚には、各種のボトルが並んでいる。その下の棚全てに扉が付いており、施錠されていた俺は、ミユキから預かったもうひとつのくさび型の鍵で全ての扉を開けた。

中には、大小の小物入れ、ちょっとした化粧直しに口紅やパウダーでも入っているのか、小さな化粧道具ケース……、手提げ金庫、ミユキとエリそして見知らぬ男女が写っている何枚かの古い写真が入った木箱、鍵の類、そして、何かの折り詰めとして使われていたような化粧箱まである。

俺は、その一つ一つを検めていった。

そのうちの 하나가、一際俺の目の惹いた。それは、一番左側の棚にしまい込まれていた、埃まみれとなった何体かの彫り物のようなものの中の一つだった。長い間手付かずだったらしく、かなりの埃がこびりついている。俺は、箱の埃を丁寧に取り除いていった。

「これは……」

間違いない。それは”死の箱”と呼ばれる、不吉な予言に象

徴される魔性の箱だった。これまで、死神の誰一人、手にする事は
おろか、目にしたことすらない代物である。

いつ誰の手で作られたかは知れず、地獄の血塗られた土埃と焰で造
られたと言ひ伝えられている”死の箱”。俺でさえ、この箱の詳
しい由来は知らなかった。

『何故、此処に』

俺の頭にまず浮かんだのは、ミユキに対するちよつとした疑念だっ
た。

死の箱がここグリフィンにあるということは、少なくともミユキ自
身その存在を知っていたことになる。

だが、そんな疑念は俺の頭の中で即座に打ち消されていく。だいい
ち、ミユキを誘ったいま、ミユキが死の箱の存在を知っていようが
いまいがそんな事はどうでもいいことだった。どうしても気になる
のなら、ミユキをこっちの世界に戻した時に訊いてみればいい。

ミユキは、きつと、こう答えるに決まっている。

『知らないわ。あいつが勝手に置いていたんでしょう』と。それで、
すつきりするはずだ。

些細な疑念をよそに、俺は夢中で箱の”入口”を捜していた。と
ころが、複雑な紋様を彫つてあるキューブ状の表面には、隙間も切
れ込みも見当たらない。

いつものように”赤のカード”と念じてみても、それも繰り返
返し繰り返し、何の変化も起こらない。

『やっぱり、死神には扱えないカードなのか』そうあきらめかけ
た時である。

箱の上面がリフトのように持ち上がり、上面が半面ずつ左右に開い
たのである。

俺は箱をカウンターテーブルの上に置き、恐る恐る開いた口を上か
ら覗き込んだ。

箱の中には、黒い靄が立ちこめ、その中に、一枚の真黒なカードが
ふわふわと浮かんでいる。

「黒……」

俺は、注意深く開いた口の中に人差し指と中指を差し入れカードを取り出した。

おぞましいことに、カードを箱の中から取り出した瞬間から、見る見る血のような赤色に変化していく。

「これが、赤の…カード…」

赤のカードに違いなかった。決して使ってはならないとベルタが言っていた、復活のカード。

あの時、俺はベルタに使ってはならない理由を訊いておくべきだったのかも知れない。

しかし、理由を訊いていたところで、赤のカードを使うこと以外、ミュキとエリを助けられる方法はない、そう思い込んでいた俺を止めるほどの理由などありはしない。

残された時間が少ないものと焦りを感じた俺は、大急ぎで精神を集中した。

呪文を唱えながら、特性の筆記具 ” さやえんどう ” をジャケットのポケットから取り出す。

” さやえんどう ” が銀色に光っている。精神の集中が最高潮の達したのである。

俺はゆつくりとさやえんどうを走らせ、カードに『ヤエガキミュキ』、『ヤエガキエリ』と書き終わった。

ジッポーを擦り、少しずつ、ゆらゆらと揺れる炎をカードに近づけていく。

すると……、

「これは、いったい……」

川面を這うあめんぼうのように、カードに書いた文字が動いているではないか。

俺は、忌むべき事態を避けようと反射的に炎をカードから遠ざけた。何事もなかったかのように、カードに元通りに文字が並んでいる。

錯覚だったのか……いや、錯覚じゃない、確かに文字は動いていた

……。

ジッポーの炎が突然大きく揺れカードに触れたのは、その直後だった。それは、ほんの一瞬の出来事だった。カードが黒い炎を発して、跡形も無く消失してしまったのである。

「はっ」

それが合図のように、突如眼前に広がる、灼熱の炎と焼き尽くされる夥しい数の人間の身体……、

その皮膚が、肉が骨が溶解していく酷い有様……。

「あああ……」

極限の苦痛の叫びが、もがき苦しむおぞましい姿が、その皮膚が肉が骨が溶け落ちて発する異様な臭気が俺に迫る。

「ま、まさか……」

信じられなかった。俺は、地獄の炎の中で焼き尽くされる夥しい人間の中に、ミユキとエリの姿を見たのだった。

もがき苦しむ、ミユキとエリの恐ろしい形相。

肉体が地獄の炎に焼く尽くされたのち、その魂は死神をも駆逐する凶悪な悪霊として復活し、善良な魂を喰い尽くす。

その先には、あらたな地獄の世界が待ち受けている。

あらたな地獄の世界に通じる門を開くのは、ミユキとエリの邪悪な魂であった。

俺は、人間のように怖気づいていた。やがて訪れる真の恐怖に、わなわなと震えていた。

ミシミシという音が、途切れなく聞こえ続けている。

亀裂が、恐ろしいほどの速さで、結界の奥深くに入り込んでいく。

結界の崩壊が、間近に迫っていたのである。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6701/>

死神のカード

2011年11月17日21時41分発行